HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ホトニクスワールド・コンソーシアム訪問調査
Citation	高等継続教育研究, 1, 137-144
Issue Date	2002-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/51864
Type	bulletin (other)
File Information	Hotonikusu-1.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

（6）ホトニクス・ワールド・コンソーシアム訪問調査

2001年11月28日　14:00～15:30
千歳市企業誘致推進室 科学技術振興課
泉 博 氏
訪問者　相川・相澤・姉崎・上田・川瀬・後藤・佐藤谷・布上・光本

泉　　小さな自治体に大勢お越しいただき、宣伝もさせていただけるので、嬉しく思っております。

私、地方公務員なのですが、大学設立と同時に大学へ派遣になりまして、 3 年間在籍していました。会計課、教務課、学生課を担当しました。そしてこの 4 月からこのポストにおります。そういう関係で、学部生とか院生とか、千歳科学技術大学はまだ院生はいませんが、若い方を見ていると非常に嬉しくなってきます。久しぶりに、アカデミックな気分を味わっているところでございます。

余談になりますけれど、私、北大の方に非常にお世話になっております。科技大では心理学などの非常勤講師をお願いしていましたし、そのほか、数学や電磁気学という科目は 1 コマ 90 分やったあと、また 1 コマ演習をやります。そういうとき、どうしても教員 1 人では忙しくなりますのでティーチングアシスタントを北大院生にお手伝いしてもらっています。そういうことで北大院生の方々とネットワークができまして、飲んだり、後任者を紹介していただくことで助けられたりと、そういう楽しい経験をしております。そういう意味で、北大には特別の思い入れがあります。

北大の何人かの教授の方には今からご説明いたしますホトニクス・ワールド・コンソーシアム（*Photonics World Consortium* 、以下、「 PWC 」と略す）の会員にもなっていただいて、いろいろと知恵を出してもらっています。それから、以前、私は市立総合病院におりまして、そのとき、在籍医師のほとんどが北大出身でした。また、診療応援や手術応援でも、ずっとお世話になっていました。そういうことで、このお話をいただきましたとき、「皆様の期待する内容になるかどうか分かりませんけれど、引き受けさせてもらいます。」とお返事した次第です。これをご縁に、一つよろしくお願いいたします。

それでは、本題に入ります。資料を用意しておりますので、そちらをご覧ください。それにしたがって説明しようと思います。

大学設立の経緯

はじめに、8 万 9 千人、予算規模が平成 12 年度の一般会計で 330 億くらいの市で 100 億くらい使って大学を建てたのですが、どうしてこんなことになったのかということに興味があるんじゃないか思いますので、そのあたりからお話しします。

北海道はどこの町もそうだと思いますが、工業団地をつくって、大手の企業を誘致して、何とか活性化しようという方向が基本的にございまして、千歳市も当然そういうことであります。もともと空港のある便利なところですから、この優位性を生かして企業誘致を促進させたいということで私どもの先輩ががんばってきました。昭和 37 年くらいから、ある法律によって、工業団地の造成が始まり、その後、他の法律に基づくものなども含めまして現在までに 9 カ所つくっています。

光本　千歳は道内では第 1 号だそうですが。

泉　　そうですね。現在までに誘致したのが 217 社、現に操業しているのが 171 社です。そういう傾向で、ずっと企業立地がすすんで、事業化がすすんで、工業出荷額が増えてきているのですが、ご存知のように国内では産業の空洞化が起こりはじめまして、製造業等がどんどん中国や東南アジアなどにシフトしまして、経済に力がなくなってしまいました。北海道も同様ですが、もともと産業基盤も弱いですし、なかなか発展できないわけです。誰でも考えることですが、何とか起爆剤がないかということで、「もっと高付加価値のものがあればいいじゃないか」「もっと高度な産業を誘致すればいいじゃないか」ということで、差別化をはかりはじめました。後でお話するホトニクス・バレー・プロジェクトとのかかわりのある新千歳空港が平成 4 年 7 月に

全面的に建て直されて開港していますが、その前の昭和の終わりくらいから、ずっとそういう気持ちがあったようです。

ちょうど今日の質問にもございますけれど、テクノポリス法という法律が昭和 58 年頃にできまして、全国各地で指定を受けはじめて、北海道では函館が一番先に指定を受けました。それで、道央地域も負けちゃいられないということで、 3 市 1 町、苫小牧・千歳・恵庭・早来、この 3 市 1 町でですね、何とか指定してもらえないだろうかということで、北海道と協調して、そしてテクノポリスの指定をとりました。平成元年 2 月に国の方から計画承認がなされました。テクノポリスの精神などについては、配布資料をご覧下さい。

そうすると今度は、高度産業、高付加価値産業の創出や育成のために優秀な人材が必要となります。グローバル化した中で、世界的に通用する人間がほしいということで、そういう人間の育成ですよね。そうすると、技術改革、あるいは創出、そのためには、やはり大学がいるんじゃないか。高等教育機関がいるんじゃないかと、誰でも考えることですね。そして理工系の大学をすぐイメージしますよね。最初は、笑い話なんですけどね、千歳なものですから、スチュワーデスの養成学校を誘致しましょうかとか、このような専門学校や高等教育機関を誘致するためにいろいろ考えたようですが、結局、優秀な人材を輩出するような核が一つほしいということで、大学の存在を意識し始めてきたようです。

ちょっと話を置いておきまして、昭和 53 年から「臨空工業団地」といって、職住隣接の新しい形の団地をつくったんです。その構想段階のときに、10 年後くらいの第 2 期工事の中で大学を誘致しようということで、そういう時代から大学がほしいという下地ができていました。

で、話を戻しまして、平成元年あたりから、いよいよ現実味を帯びてきました。まさか小さな自治体が建てるということはありえませんので、誘致というかたちでずっとやってきます。平成 2 年 7 月頃に、はじめて私どもの先輩が、本州のある理系の大学を持つ学校法人に行きまして、ある一定程度の水準を確保したいということがあったものですから、そういう、名前を出すとすぐ分かる大学に、何とか北海道に来ていただけませんかと。すると非常に感触がよくて、一時、「○○大学、千歳に誘致決定」という新聞記事まで出た状況になったんですが、実はちょっと最後の方で、法人側の事情がありまして、その話は頓挫してしまいました。平成 2 年から 3 ～ 4 年かけて、ずっと誘致、誘致で来たのに、ある日突然、その話がなくなってしまいました。

しかし、千歳市では、いま言ったような事情があるものですから、大学をほしいという気持ちに変わりはなく、しからば、自分で建ててしまえ、ということになりました。ということで、まったくズブの素人が、とよく言われるんですが、これはできないものらしいんですね、経験のないものがやるというのは。

ホトニクス・バレー・プロジェクト

泉　それで平成 6 年に、どういう大学を建てるべきかという話になったときに、ここは大手の企業が進出しておりますので、ある企業を通じて、相談いたしましたら、うまい具合に、慶應大学理工学部でプラスチック光ファイバーを研究している佐々木敬介という当時の教授を紹介してくださいました。それで平成 6 年 6 月 6 日という非常に分かりやすい日に、その先生にはじめて市の職員が打診して、即決かどうかは承知していませんが、非常によい感触だったということです。

当時、大学の学部は飽和状態。したがいまして、当時は福祉関係か先端技術の大学ということであれば、それは設置認可の可能性があるかもしれないと言われていたようです。そのときにちょうど POF 、プラスチック・オプティカル・ファイバーという技術をもったその先生が、今の科技大のようなイメージの大学をつくりたいという夢の実現のために奔走してくださいまして、平成 10 年 4 月に開学するということで、千歳科学技術大学の姿が見えはじめてきました。

理工系の大学というのは大学院があって、より体系的な教育、研究ができるようです。佐々木敬介学長の考えられた、建学の精神にもなっていま

すが、「人知還流」「人格陶冶」という二つの言葉があります。そのうち「人知還流」ですね。有能な人材や研究成果が世界で試されて大きくなって科技大に戻ってくる。そういうことを考えておられました。当然、彼はこの方面での欧米の優れた制度を承知しておりますので、産学官連携がなければこれからの社会ははじまらないことは十分承知しております。そういうイメージが、すぐさま具体化されました。

それで、結論的に言いますと、科学技術大学を補完するために、そういう産学官連携組織をつくる。そして具体的に何をするかというと、光に特化した最先端の頭脳拠点をつくり、高度産業集積をするというホトニクス・バレーという構想ですね、そういうことを、科技大をコアにしてやろうということになりました。その先導プロジェクトとして、科技大の設立と、ホトニクス・ワールド・コンソーシアム、通称 PWC の設立があり、ともに予定どおりできあがりました。

現在、ホトニクス・バレーというのはどこにあるのか、という話になるかと思うのですけれども、このパンフレットの後ろに空港周辺の地図があって、 23 頁の「千歳・美々ワールド」という工業団地があります。美々(びび)というのは、この大学のある地名ですね。その中で紫色になっている「学術・研究ゾーン」。ここに、大学の講義棟と、研究・実験をする研究実験棟の 2 棟が離れて建っていて、その間に美々川の源流が流れておりまして、これは千歳湖・ウトナイ湖につながっていまして、この源流部が深い谷になっていますが、ここに人道橋をかけまして二つの棟を行き来しています。まあ、笑われるかも知れませんが、「ここがホトニクス・バレーだ」と言っています(笑)。

それから、さっき言い忘れましたけど、テクノポリスのことだけをお話していますれども、空港周辺地区には国の他のプロジェクトも位置的に重なっておりまして、今、皆様方がいるこの場所もそうですが、平成 4 年くらいに「オフィス・アルカディア」といって、多極分散型を目指す地方拠点法という法律ができて、首都圏に産業とか事務所が集中しているものを国内各地に分けてしまおうということの、一つの地域になっております。そういう中で、こういう産業支援施設をつくって、これがこの地区の工業団地の核となって、関連する事業・企業を誘致しようということです。こういうものがテクノポリスの後に入り込んできました。だから空港周辺開発計画というのは、何重にもいろいろなものが重なっている状況であります。そういう中で、この「千歳・美々ワールド」という多目的の団地をつくって企業も研究所も誘致するという、ここだけは市の単独の事業としてやっていますが、その中に大学を建てたわけです。

それで、私の名刺には、企業誘致推進室という一つの大きな組織が入っています。その中で、冊子の紫の「 F ゾーン」というのが、実験・研究棟のそばにありまして、私の課が研究主体の施設の誘致をする事になっています。それで、私が企業誘致室の一員になっているわけです。その他に、企業誘致課というのがありまして、 9 つの団地の誘致活動や進出企業のお世話をしております。もし、工業団地に関するご質問があれば、企業誘致課の方に聞かれればいいかと思います。

話を元に戻しますが、このような経過を経てホトニクス・バレー・プロジェクトが始まり、企業誘致活動や他の事業とも大きく関わらせながら推進中であります。

財源、市とのかかわり

泉　　いま言ったように、科技大が先導プロジェクトを担っているということですので、まず科学技術大学の説明を若干させていただきたいと思います。これから訪問する大学でも同じ説明を受ける可能性がありますので、できるだけ簡単にしますことをお許しください。

2 頁に千歳科学技術大学があります。敷地は 27ha あります。そしていま言ったように、二つの建物が離れて建っています。設立の費用は約 98 億円です。財源については、民間の法人や個人からの寄付が 12 億 4 千万あって、残りの約 86 億円は、「特別財源」と書いてありますが、要するに市のお金ですね。事業費の内訳は、二つの建物と教育・研究機器、備品ですね。それから、新設大学というのは完成年次までの 4 年間の運営資金

の一部があらかじめ必要で、その分も用意してあります。それと、土地の造成設計費、その他に、大学を建てるためには設立準備財団という財団をつくる必要がありまして、それに 4 億使っています。ということで 98 億を使ったわけです。そのほか、敷地 27ha 、時価 29 億 9 千 5 百万については、無償でいただいているということです。

設立の経緯でございますけれども、平成 6 年 6 月 6 日に最初のきっかけができて、順調にいきまして、平成 9 年 12 月に文部省の認可がありまして、平成 10 年 4 月に開学。そして、今年の 6 月に、大学院の修士課程だけですけれども、申請しておりまして、教員等の問題についてはパスしておりまして、後は 12 月の認可を待つのみで、順調に行くと、来年の 4 月から同じ敷地の中で院の方がはじまります。

現在、職員は 34 人いますが、うち 12 人が開設時から今まで千歳市から派遣されております。私もその 1 人でした。特に課長・係長という一番人件費の高い職員が派遣されておりまして、1 億円ちょっとの人件費であります。それから、民間企業の日立製作所から 1 人出向扱いとなっています。プロパーは現在 11 人となっています。

以上のような設立経緯から“公設民営方式”といわれていますが、開学時からは学校法人となっていますので私立大学です。

教員と学生の状況

泉　それから教員の方はこういう（配布資料）構成です。ここの大学の特徴は、民間出身の方が非常に多いことです。このことは、産学官連携に非常に有利に作用するのではないかと期待をしております。大学の定員は 1 学年 240 人、全体で 960 人に対して、現在 930 人が在籍しています。地方の、北海道の中の、理系離れの中の、少子化の中の、単科大学の中の、という非常に不利な条件ですが、開学効果もあって、今のところはまあまあかな、と思っています。大学院は 1 学年 12 名ずつの 24 名。当然将来は博士課程も視野に入れています。

就職状況は、今年、平成 13 年度に 4 年生まで埋まりまして、来年春に初めて卒業生を出します。私も大学にいたときに学生募集活動で道内各高校に行きましたが、やはり先生方の興味は「どういうところに就職できるか」「どういう資格がとれるか」ということです。私が行ったのは、初年度なものですから当然実績はないので、「何々分野」といった言い方をしていたのですが、それが、いよいよ見えてくる年になったものですから、ちょっとここに書かせてもらいました。卒業予定者が 260 名で、就職希望が 190 名。うち今就職内定しているのが 170 名。進学希望が 40 名で、残りが自己都合といいますか、自己解決型。「ベンチャー企業を起こしますよ」とか「家業を継ぎますよ」とか、要するに「大学の就職部を通さなくても自分で解決できます」という学生です。

それで、就職内定者のうち、今の社会情勢では全然自慢話にならないのですが、いわゆる東証第一部上場企業などの一流企業に 40 名入っております。40 名といいましても、うち 10 名は科技大に隣接のセイコーエプソンさんです。これはもう特別扱い。科技大大学院への進学は 12 名の予定です。他の大学院に進む者の中には北大大学院もいます。あとは慶應湘南キャンパスの情報系や大阪大学、電気通信大学、筑波大学というようなところです。

もう一つの特徴は、今日の（参加者の）構成と同じですが、学部生が初年度から研究室に入り込んできている状況ですね。先生方はみんなやる気十分ですし、人を恋しがっていますので、すぐこういう感じになっちゃうんです（笑）。先生方にしてみると、それは非常に新鮮に見えたようですよ。それが今、一つの売りになっている。それから、講義では前の席から埋まっていきますが、何人もの先生が「驚きだね」とも言われています。

産学官連携のイメージ

泉　産学官が連携して何をするのかということになりますが、最先端の技術、要するにシーズを出したい、そしてうまく実用に結びつけたいということですが、科技大を一つの核にしてクラスターをつくりたい。そしてインキュベート、つまり孵化する直前

のベンチャー企業の転用の言葉なんですけど、インキュベート施設がこの建物に 5 部屋あります。それは千歳市がそこの部屋代を払っていまして、基本的な光熱水費だけを払ってもらえれば、2 年間は居ることのできる部屋です。そういうものとか、その他に科学技術大学の先生がベンチャー企業をすでに起こしておりまして、それもこの建物の中に入っています。

それから新聞記事の 2 枚目に、「千歳に道内初の領域事務所」とありますが、科技大の先生が、科学技術振興事業団の方から「光と制御」というテーマでプレストという意欲的な事業をもってきまして、この研究に参加することで選ばれたポスドクの方 8 ～ 10 人の総括的なまとめ役をしているのですが、どうしても拠点がほしいということで、従来こういう事業は首都圏にあったのですが、こういう地方にもってきました。実はこのビルの 2 階に事務所ができております。そういうのも一つのクラスタなんですね。

それから、サブ・クラスタといいまして、ひとつの研究クラスタといいますか、こういうベンチャー企業をつくっている科技大の先生が、 PWC に加入しておりますが、またもう少し違う世界で、研究クラスタをつくっている。そういうものをどんどん増やしていく。そして最終的には、札幌を含め北広島、恵庭、苫小牧と、そして千歳近隣の町と一つの世界をつくる。シリコン・バレーじゃないですけど、私はそのような世界をイメージしているんです。

ホトニクス・バレーをやるときには、副産物として特許が出てくる。と、その維持管理。それから、コーディネーターといいまして、鳥瞰的にものを見てくれる人がいないとダメなんですね。いわゆる“目利き”といわれる人ですが、これが少ない。だから、コーディネーターの育成。これは国の方でも力を入れています。「科学技術創造立国」ということで、国が今すごく IT 関係に予算をつけてますよね。ちょっと横道に入りましたが、そういうことで、クラスタをイメージしまして、特許やコーディネーターのこともやろうというようなことを考えています。

実際にはまだ成果が出ておりませんので、現在は企画委員会と技術委員会だけですが、後で特許委員会とか技術コーディネート委員会とか専門委員会をつくってもいいのかな、というふうに考えております。

TLO ってご存知でしょうか、確か今、24 、5 できているはずなんですが、大学の技術を民間に移転する機関でして、国の承認機関です。 PWC は小さな産学官連携組織ですので、このような規模の大きな TLO 、例えば、北海道 TLO 株式会社というのが北大の敷地にありますが、あそこは北海道全体を見ている大きな組織です。だから、困ったときはそちらの方と連携することで、ワンストップ・サービスといいますか、誰かが相談に来ても、うちは光しかやりませんけれども、例えば農業関係の人が来たら「北海道 TLO へどうぞ」と。向こうに光の話が来たら、「千歳へどうぞ」と。そういう連携の中で、特許とかコーディネートとかの支援をしていただく。そのようなことも選択肢かと考えます。そういうことができれば、小さな組織ですが、きっとよくなる。ホトニクス・バレーはそういう存在になるべきなのかなとも考えています。

ホトニクス・ワールド・コンソーシアムの組織と事業

泉　いよいよ PWC という私どもの世界の話ですけれども、設立の経緯から言いますと、実は非常に早くできています。平成 10 年 4 月に大学がオープンしていますが、その前の平成 9 年 8 月にはすでに任意団体として設立されていました。それは当時の学長がすでにしっかりした考え方をもっておりましたので、非常に具体化するのが早かったということでございます。

起ち上げて、すぐ起きてきた問題が、法人格をもっていないということです。これは非常に不利でして、何とかとろうとがんばったのですが、株式会社は体力がない。公益法人については、いま特殊法人等を見ると認可は厳しい状況ですね。で、選択肢、というとちょっと言い方はよくないのですが、残ったのが、「 NPO だって法人じゃないか」ということです（笑）。

NPO と聞くと、みなさんはボランティア活動を組織化したようなイメージをお持ちかも知れませんけど、今は非常に多種多様なものがあります。私どものときは、北海道が、今までにない活動であると

いうことで興味を示してくれたようです。NPO の最も大事なことは、特定非営利活動で 12 の活動分野での活動だということであります。 PWC はどの分野の活動になるのかとの落ち着け方で苦労されたようですが、幸いなことに NPO 法人を取得することができました。ただ、その後、国の方では科学技術関連の NPO 法人の申請についてスムーズにいくように、法改正を検討しているとの情報を新聞等で承知しています。

当法人は、今年の 2 月に北海道に許認可の申請をいたしまして、5 月に認証を受けて 6 月 6 日に登記をし、この日で成立したということでございます。

こういうことで、法人格を取得することによって、国など公的機関の受託事業に対応できる。それから、特許の取得・管理が可能な団体になった。そして、対外的に信用ある団体となることになりますね。

PWC の組織は、先ほど見ていただきましたように、この 3 階に事務局があります。事務局長は科学技術大学の教授でございます。それで私が事務局次長、係長が市の職員で常勤職2人、あと事務補助1名の態勢です。

事業内容については、先ほど言いましたが、例えば、資料の 5 の④がそうですね。「先端技術に関する広報・啓蒙等社会教育活動」、これが NPO の方にに関係してくるような中身ですね。それから⑤の「千歳科学技術大学の学術研究活動の支援」というのが特徴でして、北海道がやるならば、道内のあらゆる大学に対してそういうことを一生懸命支援しなければならないのでしょうが、うちは小さな町ですので、まずは科技大に対してだけきちんとしていればよく、毎年 10 月に国際会議を開きますけれども、そのときに資金援助します。それから、奨学資金についても、優秀な学生のために援助しています。

大学施設で毎年開催する国際会議は非常にうまくいっておりまして、毎年著名な方をお呼びしています。今年も 9 月に終えています。今回は、野依という今年のノーベル化学賞をとった人の前の、白川先生のときに、あの先生は、ヒーガーという人とマックダイアミッドという人と 3 人で受賞しているのですが、そのうちのヒーガーとマックダイアミッドはすでに千歳に、ここに来ています。今年は、マックダイアミッドが受賞してから来ました。記念講演していただきましたけれども、ノーベル賞の授与式っていうのでしょうか、そういう話を織り交ぜながら講演していただきました。大きい意味での国際交流です。

ちょっと余談になりますけれども、一昨年にもう 1 人のヒーガー先生が来られまして、やはり 9 月、10 月だったでしょうか、あのときも、ちょうど今ごろの時期にノーベル賞の発表がありました。で、千歳にいらっしゃるときに、その先生の名前が出るんじゃないかと言われてですね、陰で祝賀会のセットまでしていたんですが、残念ながらダメでした。

ということで、割合とスムーズに小さな町でもそういうことができている状況にある。それから、私自身は語学は全くダメな人間ですので、非常に動機づけになっているのですが、ああいう方々が来ますと非常にフレンドリーにつきあってくれるんです。なぜかというと、今年来ていただいたマックダイアミッド先生は科技大の先生とメールし合うような仲ですから、千歳にいらっしゃると緊張感がありません。完全に家族同様の雰囲気で、非常にリラックスした感じです。そうするとお話ししてみたい。そこで自分の語学力ということを痛感するわけですね。で、はじめて、これじゃいけない、ということで、やっとやる気を起こすわけですね。科技大生もそういうことで刺激になっております。それで、自分たちもやらなきゃならない、とがんばっている。

それから、6 の役員ですが、これは産学官で役割を分担しておりまして、理事長が学長です。それから副理事長が千歳市助役、もう 1 人が日立製作所の部長さんです。この部長さんには企画委員会に参画していただいていますが、年に 10 回位、東京からいらっしゃいます。その他に理事が 7 人おりまして、北大と科技大から 2 人ずつ計 4 人、産業界から 2 人、千歳市から 1 人です。

会費は、1 法人年間 50 万で現在 24 法人です。個人会員は年 1 万円で 30 人います。その他賛助会員は、 PWC を側面から応援していただけるというので、1 口 5000 円いただいております。

この中には、千歳にある全国的に有名なお菓子をつくっている会社なんかも協賛してくれています。非常にありがたいことです。

それと、事業内容は先ほど説明していますので、簡単にいたしますけど、共同研究などでもっとも大事なことは、シーズとニーズのマッチングですね。つまり大学の研究と企業の研究が同じ分野であるということを認識して、それから連携して商品化して、というそこの組み合わせですね。ところが今、科技大の先生は少ないですし、企業ニーズの把握も充分でありませんから非常に凸凹があると言いますか、本当は大学の研究・技術成果と企業のニーズが互いに面になれば接点が多くなるのでしょうけれども。

このため、私どもの仕事は、当初は千歳市という狭い範囲で考えていたのですが、今は北大とか、道内の他の理系大学にも入っていただいております。企業は 171 社操業していると言いましたけれど、そういうところにも働きかけています。産学官連携組織ではどこでもやっていますが、データベース化してですね、何とか利用しやすいものをつくって、早期にマッチングさせていこうというのが私どものこれからの仕事でございます。

一応、今日の資料にもとづいて、説明すべき点を申し上げました。不足する点があればご質問いただきたいと思います。

光本　ありがとうございました。約束は 3 時までということでしたが、実は私ども、3 時半のバスに乗るものですから、よろしければもう少し時間をいただいて、質問させてもらえれば、と思います。よろしいでしょうか。

泉　　どうぞ。

大学設立の効果

姉崎　われわれもほんの少しだけですけれど、事前の情報を得ていたのですが、今日、お話をうかがって初めて知ることがたくさんありました。大学を設立していくときに、空港に近くて工業の一定のリソースがあるという千歳市の特性をベースにしているということですけれど、人口 8 万で、財政 330 億でその 3 分の 1 を充てるというのはかなりの英断ですね。最終的に設立、しかも誘致ではなく自前で、というときの押し上げていく力はどういう人たちが中心になったのでしょうか。

泉　　企画立案したのは行政です。それに対して議会というのは市民の代表ですが、設立にかかる真剣な議論がなされ、承認されています。もちろん、商工会等、多くの方々の支援をいただいております。

姉崎　今年第 1 回の卒業生を出されるということで、まだ結論を出すのは早いと思うんですけれど、中間的に少し経過されてきての印象としてはどうでしょうか。価値とか、経済波及効果とか。もちろん、もう少し長い目で見た方がいいんでしょうけれども。

泉　　誰でもそうでしょうが、投資をするとすぐ効果を求めたがります。おっしゃるとおり、長い目でいただければと思います。

常々、経済波及効果を議会等から問われます。そのことにこだわって言いますと、連関といいますか連鎖といいますか、非常に難しい話です。例えばある学生が千歳に住まいを構える。それで民間の方に賃料を払う。それから、どこどこへ行って買い物をする。市内のバスに乗る。で、市内に落とすお金がある。あるいは大学をつくるときに建設業者に払われたお金が、どこにどういうふうに使われているか。あるいは国際会議を開いて支払われたお金がその次にどのような使われ方をしているのか。例えば会場となったホテル、借り上げたバス…それらを事細かに。1 次的にはできるかも知れないですよ。でも、2 次的、3 次的にお金が使われていって、どこまで見ればいいのかということになると、非常に難しい話です。もちろん、専門的に調べる方法はあります。

お金に換算できないものも多くありまして、そういう意味での波及効果もあります。

姉崎　それから、新聞記事にも少し載っているんですけれども、特化型の大学をつくる、つまりマルチにやるんじゃなくて、この場合ですと光科学に特化するわけですが、そのときの前提になるのは、千歳にもともとあった企業のものがそういうものに特化していったのか、それとも、誘致の関係の中で、亡くなられた佐々木元学長をはじめとする人たちとの関係で、そっちの方が強く働いたのか、その

辺を教えてください。

泉　　後段の方ですね。ホトニクス・バレープロジェクトにより新産業の創出につなげようということですからね。その中で既存の企業はどういう役割を演ずるのかっていう問題がありますよね。それについても、光というのは、いろんな分野―生命工学とか環境工学とか―でのすべての応用の材料なのでこれから技術の改良などにより付加価値のあるものが生まれてくることを期待しています。

セイコーエプソンさんの開発研究とマッチングする研究を科技大の先生と共同研究する可能性もある。誘致した企業とも、このように連携していきたいと考えています。

企業誘致ばかりじゃなく国際会議についても、大学は大学で毎年開催していますけども、千歳市でも、空港のある町なので国際化の進展ということをつねに言っておりまして、それを実効あるものにしていくべきだということで、西暦の偶数年、2 年に 1 回国際会議を誘致しております。国際電気通信連合（ITU：*International Telecommunication Union*）という大きな組織があるのですが、来年はこれを招致することになっています。こういう実績も、光科学技術の拠点づくりに一役買っているものと考えています。つまり、千歳が光に特化しているとの印象が強くなります。

姉崎　初年度の卒業が今度見込まれて、すごくいいですね。就職希望、進学希望を含めて。やはり優秀な学生さんが集まってくる。

泉　　ええ、やはり 1 期生は冒険心がございます。

先生方もおっしゃってるんですけれど、慶應なんかと比べると学力も違うのでしょうけれども、「そんなことよりもやる気ですよ。どれだけやる気があるかです。」と。これから 10 年 20 年かけてですね、評価が出てくるんじゃないでしょうか。

光本　市の方ではだんだん派遣職員を減らして、大学プロパーの職員を今後増やしていこうという形で人事を考えてらっしゃるんですか。

泉　　はい。そうです。いま事務局に張りついているのは準備段階からかかわってきた市職員ですが、そのうち新陳代謝というんでしょうか…。ということで、最後はプロパーだけになる予定です。

光本　それではいいでしょうか。あわただしくて、すみませんでした。また、戻りましてから、補足で質問させてもらうこともあるかとおもいます。どうもありがとうございました。

以上